

男性の建築家といえは安藤忠雄、磯崎新両氏のようにスタンドカラーというイメージがある。「確かに多いですね。ある意味、制服」みたい。でも本人がいいならいいんじゃない」。建築家の松岡恭子さん(四二)福岡市は低い声でざらつと答える。クールな雰囲気によく着るといふ黒い装いが似合っている。

現場で足場に登っても危なくないように靴はいつもフラット。この日も黒の革靴だ。数年前に買ったジャケットの幾何学模様は、一見不規則な並びが規則的にも見える。個性的なファッションでありながら、同じ日に現場や顧客との会合、会食などさまざまな場が

とっておき おしゃれ術 40代

松岡恭子さん 建築家

建築は五十年、百年先を見据えた時間軸の中で練り上げられる世界である。そのせいか「その年の流行や廃れとか、みんなが着ているからとか、そういう観点で服を見ることはないんです」。その服が何を訴えようとしているのか。作り手のメ

あるため、いずれにも合う服を心掛けています。

ツセージが理解でき、共感できるものに着たい。「独ものは息が長い」。そんな

自分の建築観に近いものにひかれる。

共感できるものを着たい

九州大の建築学科を卒業し、都立天大学院、米国のロンビア大大学院を修了し、米国で独立した。日本

での仕事が多くなり、故郷の福岡に戻る。台湾や中国での仕事の一方、新北九州空港の連絡橋や、既成概念にとらわれないマンションのデザインを手掛けている。

「デザインって、かっこいいとか上っ面なものじゃない」。その施設と社会のあり方を取り結んでいくのがデザイン。そんな信念は、土木や建築、インテリアなど横断的な仕事を経験することで得られたという。

気に入ったものだけを身に着けるので「プレゼントする人が困るみたい」とほほ笑んだ。厳しいプロの顔にちらつとのぞいた柔らかな。クールに見えた黒は別の表情も見せてくれた。



「自分の建築観に近いファッションにひかれる」と話す松岡恭子さん